

創立80周年記念特集号 学園新聞

中央カレッジグループ学園新聞編集委員会 <http://www.chuo.ac.jp>
〒371-0844 群馬県前橋市古市町1-49-1 TEL.027-253-1105(代) FAX.027-253-1124

中央情報経理専門学校
群馬法科ビジネス専門学校
中央医療歯科専門学校太田校
専門学校 中央農業大学校
専門学校 中央情報大学校
高崎ビューティモード専門学校
中央動物看護専門学校
中央医療歯科専門学校高崎校
中央スポーツ医療専門学校
中央高等専修学校前橋校・桐生校
CRI 中央外語学院
資格の学校 TAC群馬校



for the next
誇り胸に 次なるステージへ

歴史刻み 80年

グループの力を有効活用 新たなプラットフォーム構築

「職業教育に携わり80年」。専門学校9校、高等専修学校2校、教育関連機関などを有する中央カレッジグループ(中島利郎代表)は、令和4年9月5日に創立80周年を迎えました。

本グループは、1942年(昭和17年)9月5日に学園の前身である前橋服装女学院としてスタート。以来、時代に即した職業教育を担い、多彩な分野に輩出した卒業生約3万8千人という実績を刻んでいます。

創立記念日である9月5日、群馬県公社総合ビルで創立80周年記念式典を学校関係者約300人が参加し、厳かに開催されました。

式典では、中島代表が「本日9月5日は、学校法人有坂中央学園を中心とする学園が創立80周年を迎える創立の日となります。有坂作太郎翁が前橋市に前橋服装女学院を創立したのが昭和17年9月5日です。当時の関係者、そしてまたその後の学園関係者や多くの方々にご支援ご指導とご協力をいただ



学園力を生かした新たな挑戦を呼びかける
中島慎太郎新理事長

80年の歴史を語る
中島利郎代表

創立記念式典厳かに 新理事長に中島慎太郎氏

き、高等職業教育機関としての専門学校や多くの分野における教育に携わりながら今日の中央カレッジグループが形成されています」と学園の歩みを振り返り、80年にわたる多くの方々の支援と協力に感謝と御礼を述べました。加えて、式典参加の教職員、グループ関係者に向け「世の中が非常に大きく変化している中ではいろいろな方々の知恵と知識、それから新たな情報が非常に重要となる。少子化や人口減少社会を迎えていく日本で学園の舵取りは常に難しくなることは間違いがない。しかし、人にできて自分にできないことはないと言った皆さんにも思ってもらい、発見のために旅をし、自分自身をさらに高めてもらうとともに、皆さん自身が心豊かに学園とともに歩んでもらえるように積極的なチャレンジを心からお願いしたい」と今後の挑戦を呼びかけました。

また、10月1日付けで学校法人有坂中央学園理事長に就任する中島慎太郎副代表から「グループ力を生かした新たなプラットフォーム構築」を中心とした抱負が述べられました(抱負詳細

は4p掲載)。

続いて顧問・役員・評議員代表として石坂満教育顧問、同窓会代表として光山喜一郎同窓会会長・理事、教職員代表として五十部昌克教育本部長、特別講師代表として塚越祐子講師から祝辞を賜り、教職員を代表して柳田祐大教務部長、石黒涼子課長(中央情報経理専門学校)から誓いの言葉が述べられました。

記念事業も多彩に

創立80周年を迎えるにあたり、キャッチフレーズ『for the next 誇り胸に 次なるステージへ』のもと、各種記念事業を展開しています。

2月の「除菌シート」寄贈(医療・社会福祉施設や教育機関など約600施設)を皮切りに、グループ全体でSDGsの活動準備を行い、4月からSDGs教育「CSCP」をカリキュラムに導入しました。また、CCGリカレント講座Benefit for your lifeを7月に開

多くの人たちを支えられ 「実学実践」の基盤づくり

設、各校の教育内容を中心にオンライン講座(YouTube)とリアル講座で幅広いテーマ内容を来年3月まで提供予定です。8月末から9月にかけて4校の学生が参加し尾瀬SDGsハイキング(尾瀬ガイドツアー・尾瀬戸倉ブナ林の間伐体験・ヤマネ調査体験)を実施。9月23日にはグループ合同で合同学園祭をピエント高崎で初開催しました。

10月24日には、宇宙飛行士山崎直子氏による記念講演と群馬交響楽団によるコンサートを高崎芸術劇場で学生・生徒に向け行います。また、『スターライトアクアリウム2022～水と緑と光の饗宴～』と題して、ぐんまフラワーパーク協力のもと「群馬に水族館を」というコンセプトで県間交流イベント(移動水族館)を11月12日・13日に開催します(各事業の詳細は『学園新聞』第56号にも掲載予定)。

時代に対応した職業教育を実践

創立80周年を記念し、学園新聞では、「創立以来の歴史」「現状と今後について」などをテーマに、学園グループの中島利郎代表、学校法人有坂中央学園及び学校法人中央総合学園の中島慎太郎理事長、上毛新聞社取締役の清水直樹営業局長による鼎談を企画しました。内容を掲載します。

参加者

- 中央カレッジグループ 代表 **中島 利郎氏**
- 学校法人・有坂中央学園 理事長 **中島慎太郎氏**
- 学校法人・中央総合学園 理事長 **中島慎太郎氏**
- 上毛新聞社取締役 営業局長 **清水 直樹氏**



学園グループの歴史と現状、将来を語り合う参加者（8月29日、学園本部特別室にて）

歴史

清水直樹局長 学園創立80周年、おめでとうございます。今回の鼎談に際し、上毛新聞社の過去の紙面を調べましたところ、前橋高等経理学校から中央情報経理専門学校への校名変更の広告が、昭和62（1987）年10月に出ています。「21世紀に向けて校名変更」のタイトルで、翌年4月からの変更を読者に伝えています。80周年の歴史の中で、一つのポイントになる資料だと思いいコピーをお持ちしました。

中島利郎代表 これは珍しい。昭和40年に前橋商業学校を前橋高等経理学校に名称を変更、昭和63年に中央情報経理専門学校に変えましたから。

清水局長 今日は80周年の特集紙面ですので、学園の歴史に合わせた質問をさせていただきます。まずルーツですが、昭和17年9月5日に中島代表の祖父に当たる有坂作太郎氏が前橋服装女学院を設立しています。設立の背景や理念について教えてください。

中島代表 9月5日という点が重要、明治5年9月（太陽暦）に学制が、太政官布告を踏まえ公布されました。いわば我が国の教育制度が大きく変わった注目の月日なんです。

学園を創立した祖父は、元警察官であり、国の動きをよく知っていたのだと思う。30代後半で警察を辞め、友人の紹介で片倉組本社に入った。それが大正末期のこと。家族で東京に移りました。母も東京で育ち、服飾の学校に通っていた。昭和16年、祖父は定年退職して群馬に帰郷。友人であった平方金七先生（平方学園創設者）を遠くから見ていて、自分も家政女学校をやりたいと思っていた。準備をして昭和17年に学校を設立しました。それが前橋服装女学院です。時代が戦争に向かう中で、大変だったと思います。

昭和27年まで服装女学院をやっていました。母は子育てをしながら東京に

勉強に行っていました。服飾分野では常に学び、最新の流行を知る必要があります。理論だけでなく実地経験も大事なことでした。子どもが私を含めて3人いたので、家庭を取らざるを得なくなり、祖父に相談して前橋商業学校に変えました。学校では夜は簿記、昼はそろばんを教えていました。

清水局長 昭和17年といえば、太平洋戦争が始まって間もない、大変な時代に学園は産声を上げた。10年経って商業学校に変わったわけですね。

中島代表 昭和30年頃は服飾系の学校が一番人気だった。その花盛りの分野から変えたので大変だったと思います。当時、商業学校に切り替えてくれたので、今のグループがあると思います。昭和40年代に前橋高等経理学校に校名を変更、昼間部を設けました。そして経理の学校として本格的に始動しました。第3の変革です。「経理は経営に通ず」につながる本格的な歩みが始まりました。

清水局長 日本経済が右肩上がり成長する時代。経理の大切さを考え、大きく転換したのです。先見の明があった。

中島代表 私も小さい頃からそろばんをやり、経理で身を立てたいと思っていました。それも影響があったと思います。高校から東京経営経理専門学校に進学し、昭和41年に卒業。税理士や会計士として身を立てたいと思い、群馬に帰り、公認会計士の加藤会計事務所勤めました。当時、加藤先生は学校の顧問として側面から支援してくれていました。その頃は祖父もまだ存命で、自分が学校を経営するとは思っていませんでした。ただ、夜間部の半年コースの学生へ講義もしました。

清水局長 最初は、側面的に学校の現状を見てきたと言うことですね。そして、お母様が亡くなり、それを機に学校に入られました。

中島代表 その時、私は加藤会計から



80年の歴史を振り返る中島利郎代表

転職して日東グループにいました。会計事務所でも働いていた時から会計マンで終わらず経営をやりたいと考えていました。同グループでは、部長、常務、専務をやりました。ナンバー2的な立場でしたね。38歳の時には母が亡くなり、学校をどうするかということになりました。当時はまだ学校法人ではなく、個人立学校でしたので私が設置者として届出をしました。すぐに会社を辞めるわけにはいかなかったため、昭和58年・59年と準備をして、60年に新前橋に移転しました。

清水局長 新前橋を選んだ理由は何だったのでしょうか。

中島代表 私も企業で働いていたのでいろいろな情報が入って来ていました。新前橋はまず交通の便が良い。当時は山崎学園（前橋）と石黒学園（高崎）が競り合っていて、新前橋は、2つの競合校の間に位置する適地だった。それに、当時学校長をお願いしていた山中庄太郎先生から、群馬県の委託で丹下健三先生が「頭脳の都市 新前橋」計画を作ったと聞きました。現実には、上毛新聞や群馬銀行など多くの企業が移転してきました。ただ、私たちにはお金もないので、いろいろな方のつてを頼りました。祖父の姉が嫁いでいた方が新前橋に土地を持っていて、「協力してくれようだよ」と聞きました。その方は国鉄に勤め、定年退職して余裕もあったので建物を建ててもらい、われわれが借りるという形にしました、これが現在の1号館。非常に感謝しています。新前橋移転は1つの大きな転機になりました。

清水局長 そこを拠点に、近代的な経営形態を目指された。新前橋移転を機に、改革も行い、さまざまな分野に進出できるようになった。前述した昭和63年の中央情報経理専門学校への校名変更もその一環。その時の狙いは。

中島代表 前橋高等経理学校は経理だけのイメージでした。情報化も進み、企業でもパソコンを使うようになると「情報」を入れました。当時の写真には看板にOAと入っているのが分かります。学校のパソコンはNECのN5200を入れました。いずれ情報分野を入れる必要があると思い、情報システム学科もつくりました。学校名には、地名は入れず、群馬の、日本

の中央という意味で「中央」を入れました。

清水局長 伝統ある名称を変えるのは大きな決断だったと思います。

中島代表 当時、公益社団法人全国経理教育協会へ加盟していました。その加盟校には規模を大きくしている学校もたくさんありました。それを見ていて、自分の学校もできると思い発展的に校名変更と内容を発表しました。学生がすごく喜んでくれました。

清水局長 代表はその後、平成に入り全国経理教育協会の理事長にも就任していますが、それによって人脈も広がったようですね。

中島代表 協会に入った時は経理教育の草分けの方ばかりでした。日本の著名な大先生ばかりでね。自分がまさか協会の理事長になるとは夢にも思わなかった。当時の専門学校は経理学校群が中心でした。

協会の主催で簿記大会や検定を行い、注目を集めていました。今の名誉会長は森喜朗さん。初代会長は愛知揆一さん、2代目が坂田道太さん、3代目が森喜朗さん、そして現在は麻生太郎さんです。理事長は会員校がやります。私は12代目です。

清水局長 経理教育も含め専門学校の社会的な期待が一層高まってきた時代ですね。

中島代表 私は群馬県専修学校各種学校連合会の会長も16年やりました。専門学校には高等教育機関としての役割があります。地位向上のために会員組織は必要です。

清水局長 学園創立70周年を迎え、「とことん面倒見のよい学校」を打ち出しました。この方針について教えてください。

中島代表 専門学校は、入学し学んで社会に出る、または再教育として入り直す。実践的な教育と就職までが一貫した役割です。そのためには教師の資質向上が大事です。ともすると教員はできない理由を学生のせいにしてがちです。学生はできないから入学する、学校に入れた以上は資格に合格させるために全員を受験させます。成績が足りないからと足切りしたりはしない。これを逆にすると、できないことを学生のせいにしてがちになるのです。それに加え、就職後に再就職したい人のため

“即戦力”の人材を社会に輩出



「新しい時代に対応した職業教育を」と語る
中島慎太郎理事長

に、人材派遣業の会社も作りました。卒業後も支援していくためです。

学園の現状

清水局長 学園は今年80周年。現状について教えてください。

中島慎太郎理事長 専門学校9校と高等専修学校2校の11校を有しています。学生は2000人弱です。卒業生は3万8千人ほどで、群馬県の人口で見ると50～60人に1人がうちの卒業生ともいえます。それぞれ、多彩な分野で頑張っています。各校の現状は、情報系の学科に人気がありますが、ネット動画の学科も設置しています。さらに国家資格化した愛玩動物看護師を目指す学校もあり、柔道整復師の分野にスポーツ要素を入れてリスタートした学校もあります。このように、時代の変化に合わせた人材育成をしています。

清水局長 時代の変化を捉え、ニーズの変化を常に見ているということですね。

中島理事長 文科省が認定する職業実践専門課程というのがあり、各校で取得しています。ここでは、業界や企業と連携して教育することが必須になっています。年数回の教育課程編成委員会など企業の方に参加してもらっています。このような連携などがインターンシップや実習、そして就職につながっています。

清水局長 最近では「DX」(デジタルトランスフォーメーション)などにも取り組んでいるそうですね。

中島理事長 DXデザイン研究所をコロナ禍前に立ち上げています。コロナ禍に入り通常授業ができなかった時にも臨機応変に対応できました。今では全教員が遠隔授業を行えるようにスキルも高まっており、どのような大きな変化にも対応できていると思います。

清水局長 現在では、学園の規模も大きくなり、在校生も卒業生も各方面で活躍しています。

中島代表 時代を読んで産業界に合った人材育成をしてきた結果です。ただ、十年一日のことをやっているのは淘汰されてしまう。教員の研修と学び合い、それから企業との連携も重要です。職業実践専門課程は企業の人材が教育現場にも入り、厳しい意見ももらえます。大学はある意味では塀の中で教育をし

ている。専門学校に塀はない。学びなければノーアポで出たり入ったりできるのです。

清水局長 学生への指導もしっかりされています。アクティブラーニングも取り入れているようですが。

中島理事長 専門学校はアクティブラーニングという言葉が広く使われる前からそういう教育をしていました。徒弟制度の発展みたいな形で、常に教員と学生は対話をしながら学んできました。

中島代表 それが専門学校の特徴と強みです。

80周年記念事業について

清水局長 80周年の記念事業について教えてください。

中島理事長 グループ全体でSDGs(持続可能な開発目標)の学びと実践を取り入れました。CSCP(CHUO SDGs Challenge Project)という名称で、SDGsの正しい理解、自分の学びとSDGsを結びつけるものです。そして学びを実践して、繰り返して取組を行う。SDGsの達成目標である2030年までやる予定です。取り組みに対する発信力がまだ十分でない部分もあるし、SDGsとの結びつきも弱く見えるものもありますが、これからさらに深めて進めていきたいと思っています。式典は内部向けだけにしました。9月5日の創立記念日に教職員・関係者のみで記念式典を行い、結束力を高めました。10月24日には学生を対象に、高崎芸術劇場で宇宙飛行士の山崎直子氏の講演と群馬交響楽団のコンサートを行います。ほかにも、尾瀬SDGsクリーンハイキング、移動水族館、リカレント講座、合同学園祭なども企画しました。これに先立ち、年初には社会貢献事業として除菌シートの配布を行いました。

清水局長 キャッチフレーズに込めた思いは。

中島理事長 「誇り胸に次なるステージへ」は、先達や80年支えてくれた方への感謝と、それを受け取り、実学実践の学校としてもう一段ステージをあげたいという意味を込めています。

清水局長 学生たちの取り組みは。

中島理事長 各校ごとに特色を生かし取り組んでいます。例えばフードロス



学園の現状、将来について質問する
清水直樹局長

に対して、表に出ない廃棄品の活用があります。学生たちによる学童保育では、自分たちが学んでいる分野の職業を教えたりしています。美容分野だと、大量に捨てられているカラー液の容器を洗って然るべき場所(廃棄物処理業者)に持ち込めば再利用できたりします。学生が回収してリサイクルするなどの活動内容を今後しっかりと発表していきたい。

新たな動きと展望

清水局長 学生も知恵を絞って社会課題の解決に繋げているわけですね。では今後の90年、100年を見据えた動きを教えてください。

中島理事長 まず学園を統合します。今、有坂中央学園と中央総合学園、国際中央学園の3つの学園があります。その中の有坂と中央の2法人を有坂中央学園の1法人に合併します。いろいろな意味で経営統合し、社会変化に即対応できる形にします。国際中央学園は引き受けたばかりなのでもう少し先にする予定です。人口減少社会、少子化、国際化で外国人が増えてくるなど、そういった時代の変化に向けた学校づくりをしていきたい。

清水局長 「学園の基礎固め」ということですか。

中島理事長 グループには企業群もある。学校だけだと限られた情報になる。企業があると、IT関係、派遣、研究調査、さまざまな情報が早く入ります。情報が早く入れば対応も早くできるようになります。大きな社会のうねりのなかで転換できるよう、対応できるよう、盤石な学校づくりができるようになります。常に学校を中心にしたグループであり、そのまわりに、いろいろなソースを持った企業を形成している。そのような、学園グループとしてやっていきたいし、それが望みであり今後もそうありたい。学校と企業が分離してはダメ、一体でないと。

清水局長 グループとしての強みを、一層強化していくことですね。

中島代表 あくまで人が中心、人は老いていくけどブラッシュアップ、スキルアップを図っていくことができる。それを支援していけるような教育機関であるべきです。小中高・大学で終わりではなく社会に出てからが勉強。それに対応できるような学園グループでありたいとやってきている。それが、中央カレッジグループの役割だと思っ

ている。

清水局長 80周年を踏まえ、今後の抱負や展望をお聞かせください。

中島代表 祖父や母がやってきたことを原点に今まで学園を形成してきました。今後は新しい感覚で取り組んでもらいたいと思う。新理事長へのバトンタッチは10月1日に行います。私は企業で言うと代表取締役会長のような立場になる。学校グループは新理事長が新しい感覚でやってもらいたいし、それを託したい。

中島理事長 学園の90年、100年となると社会は今まで以上に大きな変化があると思う。今も「society5.0」や「第4次産業革命」、DXなどキーワードがありますが、専門学校業界には2つの変化が求められていると思っています。一つは、教育そのものの変化と職業・働き方の変化。教育はどの方向に向かうのか、どの方向に進んでもデジタルを使って対応していく必要があります。極端にデジタルになるか、リアルに回帰するか、見定めていながら、デジタルを活用していきたい。また職業の変化もある、それに伴って無くなる仕事もある。淘汰されるものもあるし、新しく生まれるものもある。それぞれに対応した職業教育を提供することがわれわれに求められています。少し先を見ながら教育に携わっていき

たい。グループ全体としては、これまでも教育コンテンツを専門学校として提供してきている。この教育コンテンツをプラットフォームとして、子どもから高齢者までいかに提供できるかが大切。例えば、情報教育では、小学生ならプログラミング、シニアならインターネットの使い方(ネット教室)をやるとかです。他の分野でも同じです。美容や医療などにも可能性があり、デジタルを活用して地域に必要な教育を提供していきたい。また、留学生も、これから増えていくと思う。より対応をしっかりと、地域に即戦力の人材としてしっかりと送り出せるように教育していきます。

清水局長 本日は、貴重なお話を伺うことができました。学園のさらなるご発展をお祈り申し上げます。ありがとうございました。

.....
【鼎談まとめ・武藤俊史(学園本部)、編集構成・桑原高良(学園新聞編集センター)、写真・太田忍(広報部)】

中島慎太郎新理事長 80周年記念式典 あいさつ

創立80周年のキャッチフレーズは「80th for the next 誇り胸に 次なるステージへ」です。これをもとに私の今後の考えを述べてみたいと思います。

このキャッチフレーズには、2つの重要なポイントがあります。

まず「誇り」についてです。先人の築いてきた80年の歴史への敬意と責任があります。本学園の卒業生は約3万8000人、毎年700人から800人を社会に送り出しています。この数字は、極論すれば県民の50人に1人が卒業生ということにもなります。それだけ地域社会に与える影響が大

きいということ。それが誇りになり、誇りと思える存在になります。

今まで以上に責任があり、恥じることのない行動を意識しなければなりません。このことは、学園運営にも、教育活動にも求められます。す

と思います。

まずは、先進的で最先端の教育機関になることです。それはDXやデータなどすべてデジタルにシフトすることではなく、アナログでも先進的な教育や思考法、手段はあります。

先進的な教育機関目指す

チャレンジ精神忘れずに

なわち、よりガバナンスが求められるのです。卒業生・学校関係者、働いている人の誠意を受け止め、真っ正面から行動していく組織であり続けたい。

「今後の方向性(次なるステージ)」については、二つのことを言いたい

このバランスをとりながら、高度な取り組みを進めていくことが大切だと思います。

次に、多くの特色ある専門学校を有するグループの特性を生かし、コンテンツプロバイダとなっていくことが重要になります。対象も、将来

を担う子どもたちだったり、学び直しを目指す成人だったり、趣味の幅を広げたいシニア層だったり、多くの人たちにグループの持つコンテンツを工夫しながらプラットフォームを形成し提供していくことができます。このことで、少子高齢化時代に対応する本学園の新たな価値や可能性としたい。

変化の大きい時代にはチャレンジがつきものです。われわれの掲げる「やって・みて・考える、失敗から学ぶ」がより生きる時代です。私が舵取りをし、方向性をしっかり出していきます。

教職員の皆様には、しっかりチャレンジし自ら考え行動する人材として今後も、より一層のご協力をお願いしたいと思います。

80周年記念式典祝辞(要旨)

教育顧問・評議員

元中央情報経理専門学校校長(第5代)

石坂 満氏



私が平成10年に入職後、高資格取得と即社会で活躍できる「実学を学ぶ」を中心に教職員が一丸となって取り組んでいた中で、記憶に残る教育内容について触れたいと思います。

一つは教職員研修センターの立ち上げと、それを契機とした専門学校初の本学園が教育内容を網羅したシラバスの刊行です。それを高校側に配布することにより本学園の教育内容を世に示すこととなり、高校から厚い信頼を得たことです。

二つめは「歩行ラリー学習」です。体験を通し「失敗から学ぶ」貴重な経験をすることから、失敗を乗り越え二度と同じ失敗は繰り返さないことを体得する、現代社会では勇敢に物事にチャレンジし、失敗をしないための方策を身につける人材育成を求めた教育目標は貴重な指標でした。

三つめは、創立60周年の記念3大事業に参加できたことです。地域に恩返しをするこの活動は、地域の皆様からの高い評価と温かい歓迎を受け、まさに学園と地域が一体となった理想の学園の姿を目の当たりにできたことです。

創立は人の誕生と同じく意義深いものであります。古き名言に「新しい酒を古い革袋にいれる」があります。これは言い換えれば「古き壺に新しき酒を盛る」が如き、学園の創立は創始者の意志の上に現代の時流に合った特色ある教育内容を組み入れることによ

り、中央カレッジグループの学校色が一層色濃く出てくると思います。常にその時代の流れの中で、活気と活力・感動に満ちた学園、つまり、「良き先生のいる学園には多くの学生が集まる」を心に留め、今後も学園が前進していくことを期待しております。

同窓会会長・理事

光山喜一郎氏



私が学んだ時代は昭和40年代、当時は昭和町で前橋高等経理学校という校名でした。社会人がほとんどで経理に精通している人が多かったように記憶しております。勉強は大変でしたが人間関係は楽しかった。在学中の昭和47年9月、日中の国交が正常化し田中角栄と周恩来が握手をいたしました。当時の自分の社会認識としては大した関心もありませんでしたが、故「有坂作太郎」翁は1階の片隅にあった木製の事務机のところで、普段話したこともありませんでしたけれども、ウーロン茶を持ってきて「乾杯」しようと言って何人かきりの生徒にふるまっておりました。どてら姿の気難しい顔のしわが、ほほ笑んだ姿が目に見えびます。

あれから50年、幾多の変革を成し現在の中央カレッジグループとして80周年を迎えました。優秀な人間を群馬の地で育成し、群馬の地で活躍できる教育体制が見事に功を奏し、現在の発展につながっていることは間違いありません。これからも地域社会の発展に寄与できる教育機関として活躍されることを願います。

特別講師代表

塚越 祐子氏



私が中央情報経理専門学校に入職したのは平成13年、今から20年以上前のことです。個別保育のプロを育成するチャイルドマインダーコースから始まり、その後、特別講師として保育士・幼稚園教諭を養成するコースや歯科衛生士を目指すコースで授業を持たせていただき、今に至ります。

専門学校の教師生活の中で、初めから、そして今でも強く感じているのは、若い学生から学ばせていただいたことがいかに多かったかということです。恥ずかしながら、授業の準備不足のまま授業を進めると、すぐに、つまらなそうにあくびをしたり、居眠りを始めたりする学生が少なからず出てきます。逆に、自分なりに一生懸命準備し、工夫して授業に臨むと、目をキラキラさせて「今日の授業はおもしろかったよ」とか「よく分かった」と率直に感想を伝えてくれます。そして、休み時間には、その授業に関連してさらに質問したり、「実はオレもさ」とか「私の方は学ばせてもらうことも多かったです。卒業生の中には、今でも手紙やメール、電話をくれる人もいます。そんな学生が、近況報告や悩み相談をした後で「先生も年なんだから無理するなよ」といわれられてしまうことも最近は多くなりました。ここで出会った学生ひとりひとりが本当に私の人生の宝物です。また、学生に加えてさまざまな専門性を持った先生や職員の皆

さんとの出会いも私の人生の宝物だと感じています。その宝物をくださった関係各位に改めて心から感謝申し上げます。

教職員代表

教育本部長 五十部昌克氏



私が入職したのは、今から22年前、平成12年、20世紀最後の年である2000年でした。当時の学園の目標は、「県内ナンバーワン校になる」でした。私が採用された中央工学院専門学校の当時の職員室は、前橋本部館の7階にあり、仕事が終わる夕暮れ時になると、薄暮の中に雄大な赤城山のシルエットが、北側廊下の窓いっぱいに広がる景色を見ることができ、その景色がとても美しく、今でも印象に残っています。その後、校舎移転、校名変更、学科コース再編、学校再編など、さまざまな歴史がありました。中島代表の「適者生存、環境の変化に合わせて自分を変えられるものこそが生き残ることができる」という言葉を、より感慨深く感じております。今や、学園グループは専門学校9校、高等専修学校2校からなる、県内随一の職業教育機関になり、私の入職した当時の目標は、すでに達成されたと言えます。このことは、学園グループが、適者生存の原理に則り、社会の変化に合わせて、自身を変えることができた結果、だと思えます。

本日、創立80周年記念日という節目の日を迎えることができ、本当に誇らしいことでもあります。皆様の協力のもと、さらなる歴史と伝統をつくる決意の日である、としていきたいと思えます。